

中学校の部

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県知事賞

互いの思いやり

岩沼市立岩沼西中学校 二年 津田 結衣

私が交通事故を身近なものと感じたのは、中学校の前の横断歩道で警察官の姿やパトカーを見た瞬間でした。それまでは、交通事故は他人事のような、テレビの中だけの出来事ぐらいにしか思っていなかった。いつもの見慣れた景色の中に、今までテレビの中でしか見たことのない現場検証を目の当たりにした時、自転車のハンドルを持つ手に力が入り、暑くもないのに汗をかいていました。鼓動が早くなつたのもよく分かりました。家に着くまでいつも以上にゆっくりと自転車を漕ぎ、家に着いてからも落ちつきませんでした。交通事故は、他人事でもテレビの中でもないんだ、いつ誰の身にも起こり得ることなんだと感じました。

翌日、学校で、自転車に乗った中学生と車の接触事故だったと説明がありました。歩車分離信号で車側が赤だったにもかかわらず車が右折してきて接触してしまつたと知らされました。それを聞いたとき、（自転車側はルールを守っていたのに・・・）と、怖くなりました。赤信号なのに車が来るなんて、私も思わないと思います。私は、交通ルールを守つても事故に巻き込まれてしまうことがあるので本当に怖いことだと思います。

どうしたら事故を起こさないのか、どうしたら事故に巻き込まれないようにするのか、交通事故を減らすには、どうしたらよいか考えました。ゼロにするのは難しいと思います。しかし、一人一人が互いのことを考える思いやりの気持ちを持つれば事故を減らせると思います。私自身、父や母の運転する車に乗っている時は、自転車や歩行者を邪魔だなぁと感じることがあります。しかし、逆に自転車で乗っている時は、車スピード出しすぎ、危ないなぁと思ってしまいます。自分のことだけ自分勝手ではないかと気づきました。思いやりの気持ちを持つていけば車はスピードを落としたり、横断歩道の前でまったり飛び出してくるかもと注意すると思います。自転車も、歩行者の側を走行する時は、スピードを落としたり、迷惑にならないように車道の端に寄つて走行すると思います。歩行者だって横断歩道を利用したり、歩きスマホをやめたりなど、それぞれが互いのことを考えられれば、今よりも交通事故は減らせると思います。そして時間に余裕を持つことも大事になります。もしかしら、車が自転車が歩行者が出てくるかもしれないと、考える余裕が生まれるかもしれません。これからは時間に余裕を持ち、思いやりの気持ちを持ち、交通ルールを守つていきたいです。

宮城県警察本部長賞

二つの強い思い

岩沼市立岩沼西中学校 一年 菅野 由蘭

あれ由蘭ちゃんのお父さんじゃない？」その一言に私は疑問を持った。

その日は入学して間もない四月中旬。朝からずっと雨の予報だったため、登校は母に送ってもらっていた。帰りは迎えに行くと言われた時間より早かったため、校門で友達と雑談をしていた。そうしているうちに時間になったので母が迎えに来くれる場所に行こうと思つた矢先、友達が最初の言葉を発したのだ。私が疑問に思つた理由は父が迎えに来たからだ。いつも時間通り迎えに来る母が来ないことに違和感を感じながらも、友達と別れ父の車に乗りこんだ。

そして父から伝えられたのは、母が私を迎えに来る途中で事故を起こしたということだった。一瞬間の中が真っ白になり、そして心臓を誰かにギョツとつかまれたような感覚がした。どんな状況？ケガしてない？相手はいる？聞きたいことが次々と頭の中にかんてくる。父に、相手のいない自損事故で、ケガはしていない、車がこわれただけと聞いてとりあえず一安心した。その次の瞬間、心に浮かんだのは、私のせいじゃないかということだ。私が迎えを頼まなければこの事故は起きなかったのではないかと、思うと責任を感じ胸の奥がザワザワした。

警察官の事故処理後、母が帰宅した。母の顔を見たら、急に安心したのか思わず私は泣いてしまった。母が帰つてこなかったらどうしよう」とはりつめていた心がどつとゆるんだようだった。

この事故を経験して強く思ったことが二つある。一つは、事故により家族や大切な人はこのうえない心配をするものだということだ。私の知らない所で、家族が事故にあつたりしたら想像すると怖くて身震いする。同じように私が事故にあつたら両親は同じ思いをするだろう。家族にそんな心配をかけたくない。二つ目は私のように、辛くなる人がいることだ。私が迎えを頼んだばかりにこんなことになってしまったという後悔の気持ち。それから、今回の事故現場を通りかかると、あの時の記憶が蘇るためしばらくの間その場所には行きたくなかつた見たくなかつた。平静な気持ちになるには時間がかかるものだと思う。

交通事故は嫌だ。なくしてしまいたい。でも人間がいる限り、この世から消えないことなんだろうとも思う。交通事故をゼロにするのは非常に困難でも、少なくとも減らすことはできる。あたり前のことだとは思いますが一人一人が交通ルールを守り、事故を未然に防ごうという気持ちを持つこと。一人一人の後ろにはその人を大切に思っている家族がいることを忘れないこと。思いやりの気持ちとゆずりあいの精神をもつこと。以上のことを守つていこうと強く思う。交通事故を少しでも減らし皆が笑顔で暮らせる世の中になるように。

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県教育委員会教育長賞

マスクの下の笑顔まで

仙台市立第一中学校 一年 四戸 咲希

私は、交通安全について考えさせられた出来事が三つあります。
一つ目は、自転車通勤についてです。私の父は、毎日自転車で通勤しています。自転車を洗ったり、調整しているところをよく見かけます。

そんなある日、父はけがをして帰ってきました。大きなけがではなく、チェーンが外れて倒れただけらしかったです。しかし、それが車とぶつかっていたら、事故につながっていたと思います。自転車事故は、交通事故全体の二十パーセント程という情報もありました。また、自転車に乗用中の死者人数では、高齢者が多いようでした。雨の日に傘を差しながら、荷物をたくさん持った状態で自転車に乗ることも、事故につながってしまうと思いました。

二つ目は、車に乗っていた時でした。その時は、反対側の車線も混んではいませんでした。そこで、ある車が、速いスピードで一つ前の車を横から追い越して行きました。その車の前や後ろにいた車はとも驚いたと思います。どうして追い越したのかは分かりませんが、危ないと思いました。

三つ目は、一方の車が駐車場から出てきた車に、道を譲っていたことについてです。譲ってもらった側は、軽く頭を下げ、通っていききました。相手のことも、自分のことも考えながら運転することの意味に気付いた瞬間でした。このような目立たない行動こそ、事故を減らす、私たちにできることだと思います。また、譲ってもらったら、今度は逆の立場になり行動していけば、少しでも事故も減ると思います。

交通事故と言つと、車の事故という印象がありましたが、自転車の事故も決して少なくはなく、むしろ自転車の事故の方が、私にとっては身近でした。自転車を通学に使用している人もとても多く見かけます。様々なことを想定して行動すると良いと思いました。また、自分の使用しているものの特徴を知り、定期的にメンテナンスをすることも重要だと感じました。これから自転車や車に乗る機会があると思うので、その時は周りを良く見て注意しながら、ゆずり合い、時にはゆずられながら、そこで、マスクをしていても相手に分かるくらい笑顔をつくる人が増えていくと事故は減っていくと思います。

一般社団法人 宮城県交通安全協会会長賞

たいせつな命を守るために

仙台市立第一中学校 三年 山田 葵

内閣府の発表によると、交通事故死者数を年齢層別にみると、高齢者が最も多く、中でも七十五歳以上が約三十六パーセントを占めているそう。また、高齢者の交通事故死亡者数について状態別にみると、歩行中が約半数を占め、次いで自動車乗車、自転車乗用中の順に多いこともわかる。

最近、ニュースでも「ブレーキとアクセルを踏み間違えた」というフレーズをよく聞くようになった。そこからもわかるように、七十五歳以上の死亡事故の人的要因に占める割合が最も大きいのは、ブレーキとアクセルの踏み間違いやハンドルの操作不適などの操作不適であり、次いで安全不確認、漫然運転などの内在的前方不注意、わき見運転などの外在的前方不注意、判断の誤りの順に大きいことがわかる。近年、高齢者の事故を未然に防ぐために後付けのペダル踏み間違い急発進抑制装置等の開発が進み、それらを追加装備して安全対策を行うことで、事故防止に一定の効果も期待できる。また、自動車運転の実技講習会などに参加し、自己の運転技能や安全に対する認知を再確認することができ、安全運転に対する意識を一度見直すことで、事故を未然に防ぐことができるのではないだろうか。

しかし、交通安全は高齢者やドライバーが気を付けるだけで成り立つのではなく、私たち一人一人が交通安全を意識して行動することによってやっと成り立つのだ。一度自身の生活を見直してみることも必要だ。横断歩道のないところや赤信号を渡ってしまったことはないだろうか。イヤホンをつけながら自転車を運転したり、スマートフォンを見ながら歩いていることが多かったらどうか。そういった気の緩みから思わぬ事故につながってしまうかもしれない。もししたら大切な命まで落としてしまうかもしれない。交通安全は私たちの身近なところであり、自らの命の行方を左右するほど重要なものなのだ。何事も慣れてしまえば気が緩みが生じる。そんなときに今一度交通ルールを見直してみようだろうか。交通事故は誰にでも起こりうるのだ。それは歩行者とドライバーの双方が交通安全を心がけていれば未然に防ぐことができる。もし、交通事故発生時のニュースを見たなら、「かわいそう」と思うだけでなく、自分たちの周囲で事故が起こりそうなのではないか。もし事故に遭ってしまったら、起こってしまったらどう行動するべきか考えるべきだ。高齢者の人々は一度家族と免許の返納について話し合ってみてほしい。自身の運転技能に自信があったとしても、自分の命や周囲の人々の命を守るために行動を起こすことは交通安全の大きな貢献だ。

もしあなたの大切な人が事故に遭い、命を落としてしまったら……。そんな事が起こらないためにも 目指せ、死亡交通事故0。

令和4年度宮城県交通安全ポスター作文コンクール入賞作品【作文の部】

中学校の部

* 作品は原文のまま掲載しています。

宮城県PTA連合会長賞

命の大切さとは

岩沼市立岩沼西中学校 三年 小野 愛理

「二十四日夜、大型トレーラーとバイクが衝突する事故があり、バイクを運転していた少年が意識不明の重体です。」このようなニュースが私の耳に入りました。運転していた方は、バイクの動きをよく見ていなかったと話しているそうです。病気やけがの他に多くの犠牲者が出るのが交通事故だと私は思っています。運転操作を誤った事故が多い中、自分の身勝手な行動により他人を巻き込み亡くなるケースも少なくはないと思います。ですが、完全に交通事故をなくすることはできません。しかし、交通事故をなくせなくても少なくすることは私でもできます。一人一人が意識し交通事故に対してもっと真剣な目で向き合うことで、交通事故は減っていくと思います。

平成二十一年四月、東京・池袋で乗用車が暴走し二人が死亡、九人が重軽傷を負った事故がありました。当時八十九歳の運転手の方は、最後まではっきりした口調でアクセルとブレーキの踏み間違いはなかったと主張していたそうです。この事故で亡くなった母親当時三十一歳と子供当時三歳の遺族である方は、妻と娘が命を奪われたなんて。返してほしい。」そう涙ながら話していたのを私は覚えています。

命は皆一つしかありません。それに加え、亡くなってしまう人は生き返ることなどできません。このような事故に巻き込まれ、亡くなった人達にも私達と同じく家族がいます。思わぬ事故で愛する家族を失った悲しみは、言葉にできないほど悲しくて辛いものだと思います。命の大切さとはどのようなものでしょうか。私はよく両親に命を大切にしろと言われます。そんなの分かっている、といつも思っていました。失ってからではもう遅いのです。今も今後も交通事故によって亡くなる方は後を絶たないと思います。皆さんも命の大切さについてもう一度考え直してほしいです。一人一人の意識で世界は変わっていきます。

作文の部 応募作品数

小学校1～3年生の部 15作品

小学校4～6年生の部 41作品

中学校の部 161作品

合計 217作品